圓光大師傳

廿五 廿六

法然上人行狀畫圖第二十五

勸化上都よりくだりて。道德邊鄙よりおよび
しりは。鎌倉の二品禪尼。金剛戒 歸依りとを始
かたして。蓮上房尊覺を使として。念佛往生の
事尋申たまふに。彼の返事云。文をハ
しく兼ねぬ。ただ念佛の功德をは。佛の
說畫かゝとのたまへり。又智惠第一の舍
利弗。多聞第一の阿難を。念佛の功德ハ生りの

文明文庫

かゝるとのたまひし。廣大の善根よりて往へし。
まゝに源宣なんと申たくすへゝこゝを覺往
はは弥陀の昔ちゝ誓願ハあまねく一切
衆生はもれなし。有智無智。有罪無罪。善人悪人。
持戒破戒。たとへいやしきたこと女を問ずして往。
ゝハ佛は在世は衆生。若ハ佛の滅後の衆生。
若ハ釋迦の末法萬年の後。三寶これうせて後の
衆生まゝてゝたゝ念佛ばかりをゝて。現當の祈よ

なり往めるこゝはゆへよ。来て往生の道をたづゝ
往人よは有智無智我申ちゝ。一ちぢに專修念
佛を勸往ゝわゝよゝて左樣よ。專修念佛を申
ゝゝ人ゝとはゝまつる人ゝ。佛法のまもれこゝ
解脫をゝうなへる。闡提の輩なり。いゝて申往
ゝゝ。御變改往へゝ往強よ信ぜばゝん人を。
はすゝめ往へゝ往。佛をかゝゝひ強いざる事ハ
一異解の人は。餘は善根を修せんよれ助成ゝて。

思食べき様いかにも我いこまこと一向専修よて変定
往生たるべき分なり他人のことをき道をば近き
法門よ結縁せさせんことをばほめさは専修をい
まるけ侍ハば

一これ世のいとわるよ念佛の外よ佛にを神よも
申し経をよこかき佛をたてくんハ専修を
ちるる行よてハ侍へかゝ侍

一念佛を申侍事ハやうくれ義侍へらもたゞ六字侍
唱る申して一切れ行いれたまり侍なり心よ
本願をたのこ口よい名号侍ら乳へ手よい
念珠侍るゞくりなを常よ心侍くるこの
きハ見たる変定往生れ業にて侍なり念佛の
行ハこをよわ行住座卧時處諸縁をきて
ハば身口れ不浄をきてハぬ行よて易行侍
生と申侍ゆわたゞし心をきよくもて申侍
第一の行と申侍ゆわ人をも左様よれすめ

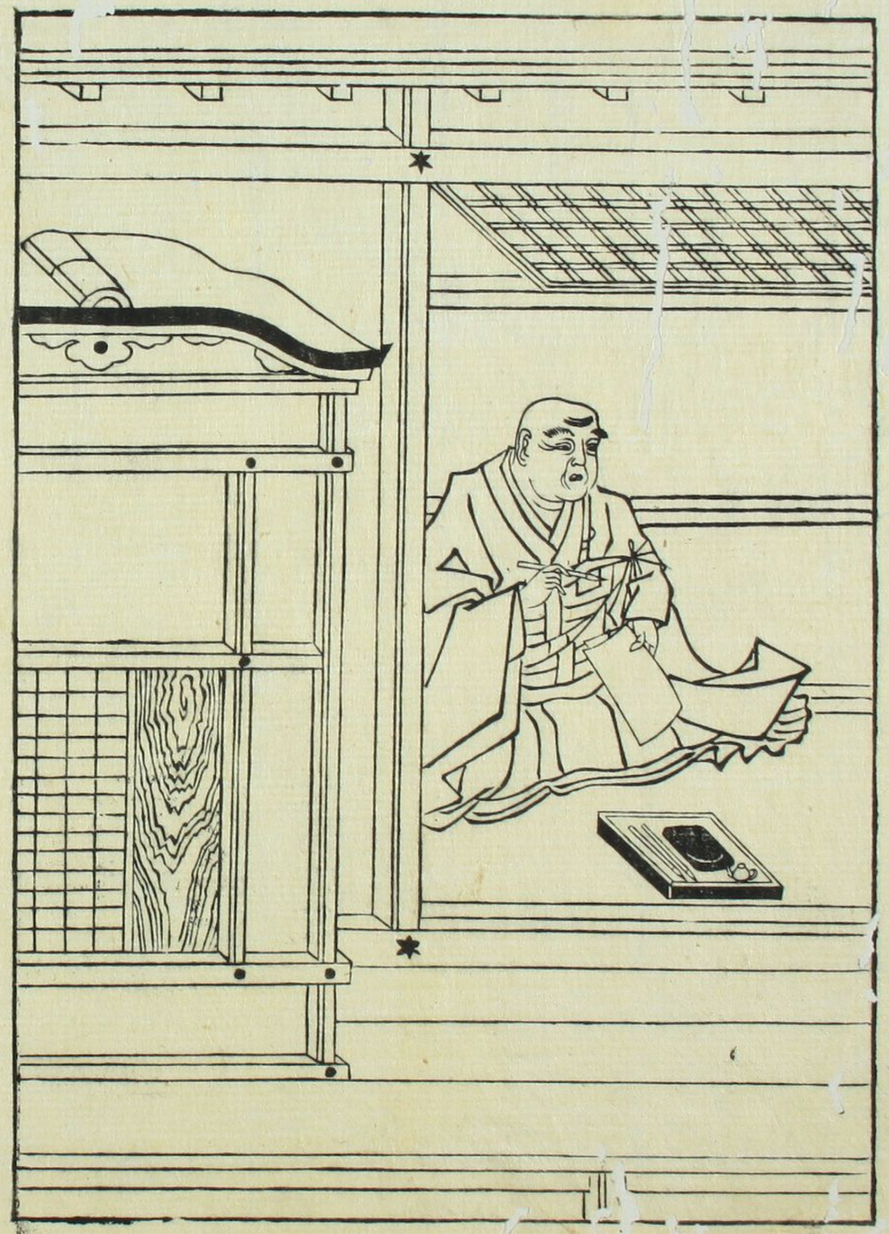
ゆめ〳〵此御ものいよ〳〵たゝなを
ゝ信ぜ給へ

一念佛の行ぜ信せば〳〵人よあひて物語ぜ
さるれいに況や宗論ぜへ〳〵強よ異解
異学ぜ人をあてこゝ論をあれづわそ〳〵る事
ぜへうら法いよ〳〵たゝり紀罪人よなる事
不便よぜへ〳〵。極樂ぜ祈ひ念佛を申さん
人をハ。塵刹ぜ外ものわらも。父母ぜ慈悲り

わ〳〵ぜ恩食へきなり。今生ぜ財寶とそ〳〵
かゝん人をハ。力をくらへはせ給へ〳〵。もし
すこゝを念佛よ心をけぜ人をハいよ
くれすゝ先ぜへ〳〵。ゆまも弥陀如来ぜ本願の。
こゝやだひと思食へ〳〵。震旦日本ぜ聖教を
らわあ問めて此間ひ〳〵紀見動へぜよ念佛ぜ
信ぜぬ人い先生におゝき罪を造く地獄よ
久〳〵あわて又地獄へ帰るべき人なり。返こ

専修念佛を現當の祈とい申候へき処に一こと
詞にも経論よりて候なれは内外人ゝ九品乃
業候へよ隨ゝきくへぬ色き候よれ勸候
色ゝあれゝこゝ

已上
暮抄



上野國の御家人大胡の小四郎隆義在京乃
ころ紀吉水の禪室に參して上人の勸化にあつ
かりふかく念佛を信受したるゝ。下國の後ゝ
不審なる事侍て上人給仕の弟子渋屋乃
七郎入道道遍のもとゝ尋申たゝる後道遍
上人に申入て侍をたゝへゝ三心以下の事ゝ
まゝに申ゝたゝて侍ゝ隆義の子息大胡の太郎
實秀。の代消息後相傳し。父のあゝ後をひゝく。

稱名は行をこそわたなれわたなれども。念佛乃安心
不審なる事侍て。小屋原は蓮性を使者として。
上人へ尋申たまはられし。真觀房は執筆とて
書たまはるべき状云
御文こまゝに兼ねぬ。とゝ侍る。念佛は事
きこしめさんゞ。熊と使をのゞせ給て。
御念佛の志乃程。返こと云。ゝ。さてこそ尋仕
こそ。はて。ゝ念佛は事。往生極樂乃ためは。

いゝ。の行といふこと。念佛ばかりすきたる事ハ
ゝ。ゝぬ。わ。ゝ。ゆへい。念佛ハこゝ。彌陀は本願
の行なるゆへなり。本願と云ハ。阿彌陀佛乃。
いまゝ佛なりし。世ざいゝ。昔。法藏菩薩と
申しいまゝ佛の國土をきよめ。衆生成
就せんがためにて。世自在王如來と申佛の
御前にて。四十八願をたてゝ。其中に。一切
衆生は往生はとめて。一の願をたてゝ。

ふき成念佛往生は本願と申也。則無量壽經の
上巻にいはく。設我得佛。十方衆生。至心信樂欲
生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺已上善導
和尚此願を釋してのたまはく。若我成佛。十方
衆生。稱我名号。下至十聲。若不生者。不取正覺。
彼佛今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆
生稱念。必得往生已上念佛といはゝ。佛の法身を
憶念するなり。佛乃相好を觀念する故

なり。心識をつくしてこゝろを阿弥陀
佛の名号を稱念する。これを成念佛といふなり。
故に稱我名号といふなり。念佛は外乃一切の
行いにあらず。弥陀の本願にあるがゆへに。た
だ口にまかせて行なりといへども。念佛にはし
かしばざるなり。大方真國にむまれんこと
をねがふのゆへは。それ佛のちかひに随ふべきなり。
はまた弥陀は浄土にむまれんことをねがはい。

孫陁乃誓願より出るがゆゑに色もなし。本願の念
佛と本願よりあらはる餘行とはたがいにさまたげ
ゐることなし。故に往生極樂はさまたげよりは念佛の
行よりとるべし。餘行をもちゐるあるべきなり
ちなり。餘行又たうちゐるあるべきなり
衆生は生死にまよふ。こゝに佛のをしへさま
くなるおほく出へたる人乃生死を
まぬがれ三界にいづる道はただ極樂に往生し

ばかりなり。されば聖教は大なるをいわ
なり。次に極樂に往生するにその行やうくに
おほく出へたる我ホガ往生せん事念佛に
あるべきなり。ひかるべきあるそれゆへ。念
佛は佛の本願なるがゆへに。願力にすがりて
往生する事はやすし。はるかに註するところ。
極樂にあるべし。生死をはなれんとおもふ念佛に
あるべし。極樂へむまれんとおもふ

ふく此能信せらせ給ふ。すなはち極樂成
就ぶつにて念佛して此度必生死を
はなれんとねがはんずるなり。又一乃
願のをなじにぶつ成ぶつ正覺をとることと
なり。ひとへに阿弥陀佛ばかりなり
あわれてよわこれをすてよ十劫をへる
まへにまことに誓願むなしからず衆
生成佛稱念するをもて一人をむかへ

往生する事成ぬべし。まことに
佛となる事をへる事を信じべき。三寶滅盡の
時なりといへども。一念をもてなを往生を。五
逆深重の人あるといへども。十念すれば往生を。
何況や三寶の世に生まれて。五逆をたくさん
我ホ。弥陀の名号を成唱へんは。往生うたがふ
べからず。今此願にあへる事。實にまことにたのもし
けの縁にあへるなり。

りすへし。たとひ又あふといへとも。信ぜさるなり。あいだるごとく。いまふく此願成信ぜさるせまもよへし。往生うかひ思食へし。必こ二心なく。よく〳〵御念佛仕て。此度生死をもれ生。極樂に生まさせ給へし。又觀無量壽經よいく。一こ光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨已上こまい光明ゆく念佛衆生成照て。餘乃一切の行人をば。てゝ捨ぶといあ也。

但〳〵餘の行成〳〵て。極樂を願ふ。佛光てゝ〳〵く。攝取し給へし。いまゆく念佛のをれたるの成えゝひくて。〳〵たまへるや。善導和尚釋〳〵てれをほく。弥陀身色如金山相好光明照十方。唯有念佛蒙光攝。當知本願最為強已上。念佛いこれ弥陀の本願乃行なるこのゆへよ成佛れ光明へまて本地の誓願をてゝ〳〵たまふなり。餘行いこれ本願よあ成

ぢるがゆへよ。弥陀乃光明きゝひくてゝ
たまへざるなり。今極楽後をこ[illegible]人へ。
本願の念佛を行しゝく。摂取乃光よてゝ[illegible]
菩と思食へし。これよりたけてを。念佛大切よ仰。
ゝゝ中さを弥へし。又釋迦如来これ経の
中よ。定散乃を[illegible]ゝく乃行後説をつもて後よ。
まさしく阿難よ付属しなまふこきよは。
よ説ゝこゝ[illegible]乃散善乃三福業。定善の十

三觀をは付属せ[illegible]ゝ念佛乃一行を
付属したまへわ。経よいゝく。佛告阿難。汝好
持是語。持是語者。即是持無量壽佛名善導和尚
これ文を釋してのたまゝく。従佛告阿難汝好
持是語已下。正明付属弥陀名号。流通於遐代。
上来雖説定散両門之益。望佛本願。意在衆
生一向専稱弥陀佛名。此定散乃諸乃行ハ。
弥陀の本願よあゝぢるゆへよ。釋迦如来の。

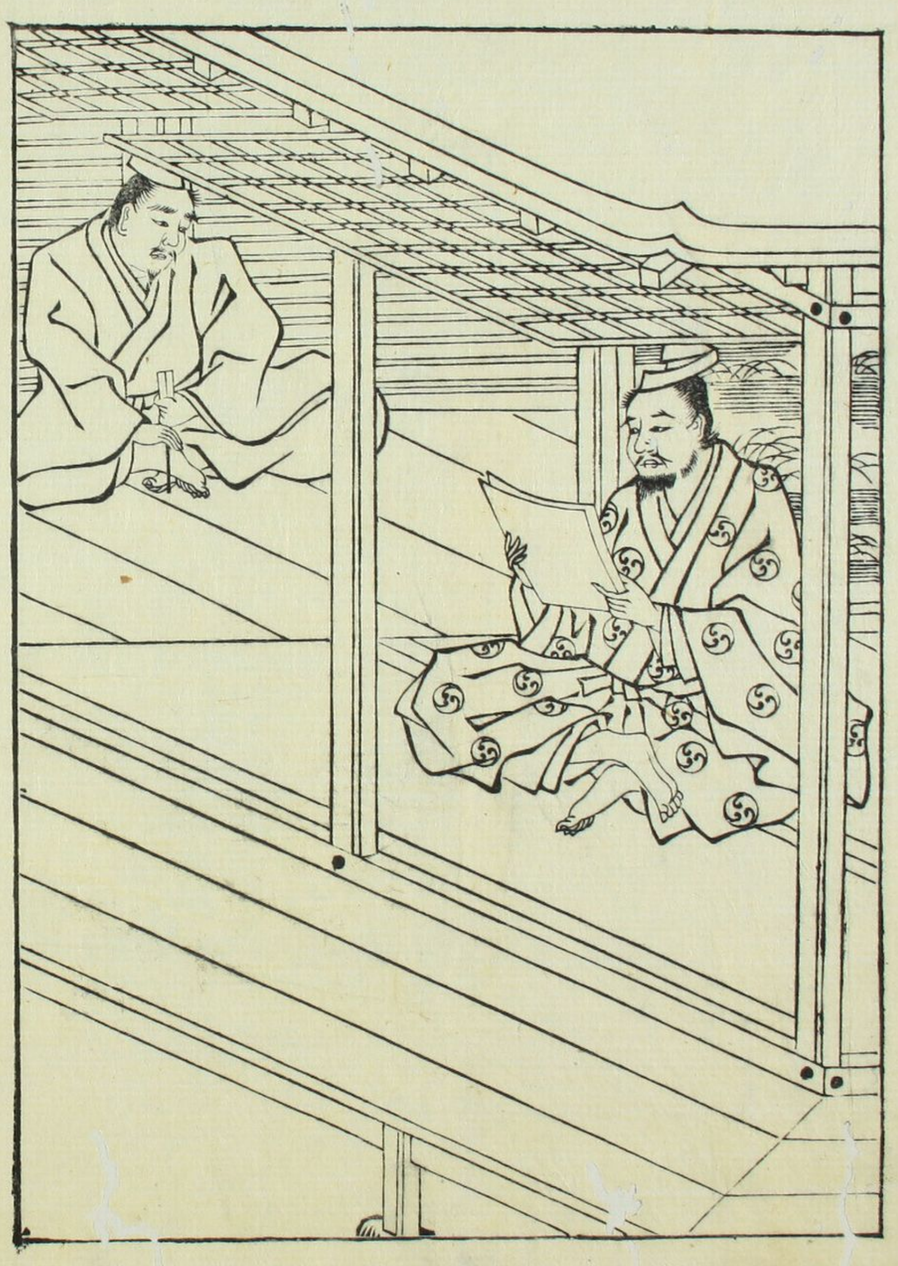
往生の行を付属し給へり。餘の定善散善をは
付属せずして念佛ハこれ弥陀の本願なるがゆへに
ものこゝろえひとしく本願の行を付属し給へる
なり。いま釋迦の教へに随て往生をもこゝろ
ゝの付属乃念佛を修して釋迦の御心を
うなゐへ。これまたたゞもっぱら御念佛
ゝて佛の付属にかなひ給へり。又六方恒沙の
諸佛舌根のへて三千世界にわたりてこの
ものく弥陀の名号を唱へて往生すべしとこれ
真實也と證誠したまへるなりこれ又念佛ハ
弥陀の本願なるゆへなり。六方恒沙乃諸佛
ことを證誠し給へり。餘の行ハ本願にあらざ
るゆへなり。六方恒沙の諸佛證誠したまへる次
ものくく御念佛ゝて弥陀の
本願釋迦の付属六方の諸佛の護念をかうむ
かしめたまへり。弥陀の本願釋迦の付属。

六方ハ諸佛ハ護念。一ニニにしなり。かゝるこの
ゆへに念佛の行ハ諸行よりすぐれたるなり。又
善導和尚ハ弥陀ハ化身なり。浄土ハ祖師多
しといへども。ひろく偏に善導よりる。往生ハ行
多しといへども。大よりもちて二ニ弘へり。
一ニハ専修。いはゆる念佛なり。二ニハ雑修。いは
ゆる一切のもろもろの行なり。上にいふ所乃
定散等これなり。往生礼讃云。若能如上。念念相
続畢命為期者。十即十生。百即百生。已上専修と
雑行とハ得失なり。得といふハ往生する事なり。
いはく念佛をもるもハ。十ハすれども十人なり
往生し。百ハすれども百人なり。往生すといはゆ
これなり。失といふハ。いはく往生の益なし
なへるもハ。雑行のもの。百人の中よりまれに
一二人往生する事なれども。そのほかの生ぜず。
千人の中にハ三五人ばかりまれにそのほかハ

しよれそ。専修のそれいこれしよう事なるハ
なにのゆへぞ。阿弥陀佛乃本願ハ。相應せるゆへ
なり。釋迦如来ハ。そなへよ。随順せるゆへなり。
雑業ハ。ものハ。しやうゝ事すくなきゆへ乃
ゆへそ。弥陀ハ本願ハ。すぐへるゆへなり。釋迦の
をしへハ。ものいとゝ。ゆへあり。念佛して。浄
土をそこしるりハ。二尊ハ御心ハ。ぬくゝれ
へり。雑修をして。浄土ハをとしるものハ。二佛の

御心ハそむけ。善導和尚ハ。二行乃得失を判
でる事。ハ。ハきハ。ハ。ハ。観経の疏と申ふ
中ハ。おろく得失ハ。あけ。ぬきハ。ゆへり
いとさハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
そ。ハ。ハ。ハ。地獄ハ。堕ハ。五劫苦ハ。ハ。事
きハ。ハ。ハ。信ハ。ハ。ハ。浄土ハ。ハ。ハ。
永劫の樂をうる事。ハ。ハ。ハ。ハ。ハ。
いよく信心ハ。ハ。ハ。二心なく。念佛せハ。

たまゝへ〜ぐうまき事。ひふとにつゝがなく侍。
これ四つゝ申侍へし。正月廿八日源宣上實秀
よの消息ゝ恭敬頂戴して。一向り念佛ゝ。
寛元四年往生ゝ時。異香ゝりぎ。音樂をきく
をれおほうゝき。實秀ゝ妻室ゝふく此消息の
をゝへを信受して。稱名ゝ行をこゝろなくゝて
みよ奇瑞ゝあゝゝ。往生ゝ素懐をとげゝる
ゝれ者。



武蔵國那珂郡の住人孫次郎入道（不註實名）は。上人の教誡をかうむりて。一向專修の行人となりにたり。たまつるところの御消息を秘藏して。出離の指南とたのみ。侍る。少しも數返ぐる。めぐらしあるべかりけり。常に西向て高聲よとなへける。病惱の時。八月廿九日（不註年月）近隣なる僧蓮臺房。來りて。ひたすら。此所勞八日。此所なり。明後日來臨し給へ。

中ゐき事ゐりと申なれ。うれ日又まうれ申て。
明後日辰時より。極樂にむかるゐ申と申あり。
いうゐてさうと云わたまへゐ申ぞゆきとへいそれ
事ゐわ。義より墨染乃衣着したる僧。青白
二豊の蓮花ゐりて来きわいるゐ。白蓮花を
ゐれよりいでて。ゐまきハ汝ゐ分なりこれ青蓮
花ハ。新田れ太郎ゐ分なりと。行くれたるに
白蓮花のうへより又聲あわて。九月三日れ辰時よ

往生すへしと云やと思て居ゐるなりといわ。
事れ様たらく覺へて。三日よ又ゆきまよよ。
病者れいく。往生ととてにちゐれなわよくき
うわうまへわ。四十九日れ間ハ。こて行しく
念佛しきまへし。御房いわ善知識ゐ。
年来秘藏のゐれ附属しきてまうへし
とて。上人へうわたまつゐ申ゐれ消息。なるひよ
和字よりゐるゐ。念佛の安心れ書等こゐれ

ゐる。其後あひさて晨朝に礼讃を行ふ
ものに光舒救毘沙門白毫いりて礼讃終ら
ん。念佛三遍唱へく。端座合掌して。息た
えよりも。四十九日に夜蓮臺房ゆめにみる様。
の禅門。持佛堂うれたりき堂あり前に
池なんとありて。ひろびろくんゆるに指入て拜
ゐれば。金色の阿弥陀如来壇の上に立給へり。
堂に下りよ。念佛する聲あり。兼仕なと云

ゐるなるもに指出て此聲八闍浮提也只今
此池の中に蓮花生すへ。ゆき給へと云
聲に應して。白蓮花出生す。念佛の聲に
随て蓮花忽に開く。此花に上り。亡者に禅門
墨染の衣着て座ゐる。時に微風この花を
吹に風に随てなびきたる。禅門蓮花に
おりて語ていく。ゐる極樂に下品下生り
出ゐり。只今上品にすむなりと云ひて。

法然上人行狀畫圖第二十六

武藏國の御家人猪俣黨より。耳糟の太郎忠綱と云者ありき。ふかく上人より歸し。念佛の行をこころゝ

ざしたりしかの山門の堂衆等。獨歩の人あ

まり。衆徒を忽緒し。日吉八王子の社壇を城郭

にして。惡行をたくましくしはゝ武士をたゝきて

せめ〳〵れし。時忠總勅よりて應して建久三年十一月

十五日。其城郭をうちやぶる。上人より來りて

申様我ホトケの罪人なりとて本願を頼て
念佛せば往生疑ひなき旨来れをしへ給て
ぬく其貞俊存すくいへとそれハ病ハ床より
卧てのち臨終の時ハ武士のふひ
進退心よまうせばそ山門の堂衆を追罰の
ためて勅命よりて只今八王子ハ城へ向ひ
ぬ忠綱武勇ハ家より生れて弓箭の道より
たしなさるとてこそ父祖の遺塵なれ

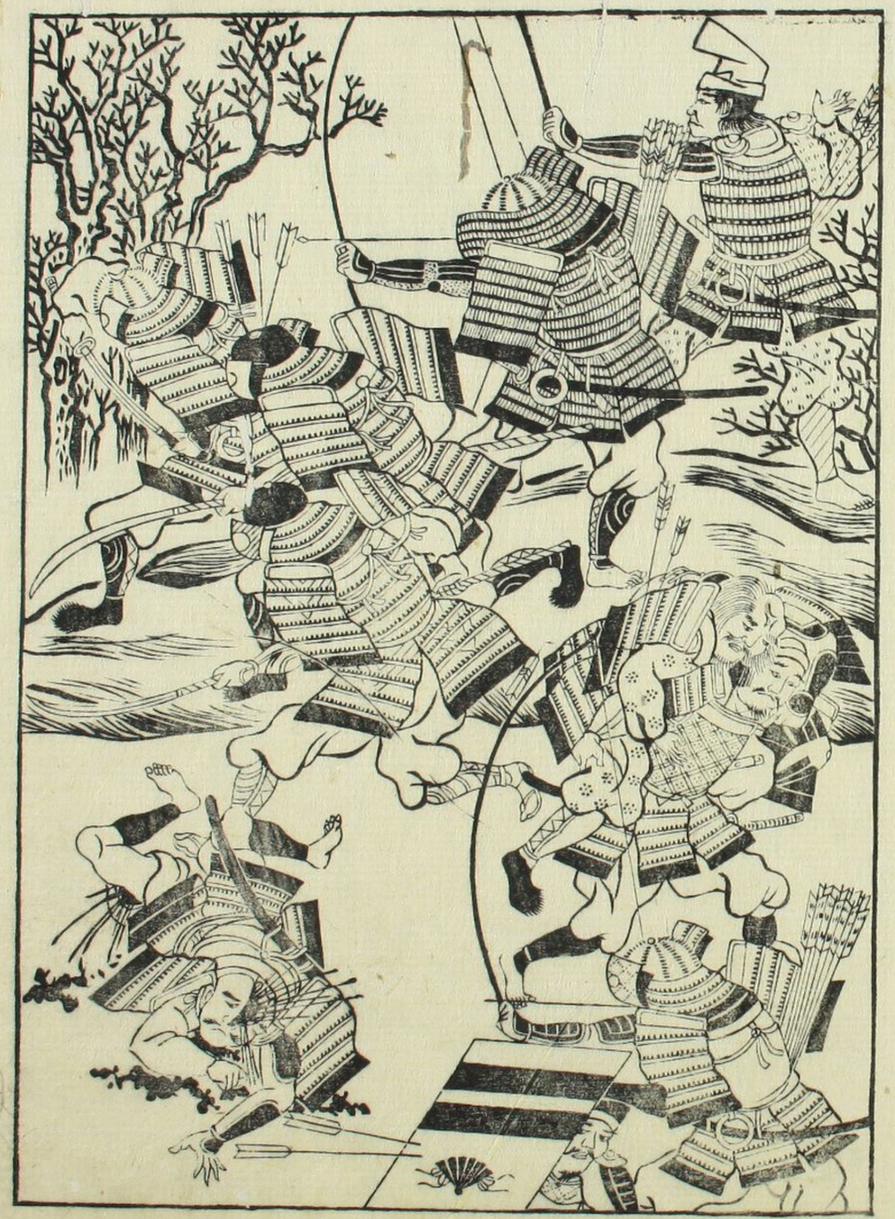
なのりをそきてハ子孫の後栄なのこさんの
事なれて敵をふせき身をすてて悪心熾盛より
して願念発起ぬ今生ハうわなる
いくさをすれとも往生ハ疑ひなきなり
ますれとのかへりて敵の中へとりこめられ
なんなく臆病ハ名なるべく忽ち譜代の
跡をうしなひ侍ん。いかさまなるいたをを
ちらへしといぬ事。愚意つきまへうし。弓箭の

家業をもすてゝ往生の素意をとゝけ道
ゝ。願くは御一言を承らんと申されし上人
ゝ為様弥陀の本願は機の善悪をいはず
行の多少を論ぜず身乃浄不浄をえらばず
時處諸縁をきらはず唯死の縁よせのみ
罪人は罪人なり。名号を唱へて往生をとゝ
本願の不思議なり。弓箭の家に生れ多年人
たらひ軍陣に出て命を失ふとも念佛

せは本願に乗じ来迎に預る事ゆめ〳〵
疑ひなしとこたへて授戒をうけ不審ひ
晴れ侍りぬ。されば忠綱の往生は今日一定
なるべしと悦ひ申されし。上人の御袈裟をかりて
ゆひ付けられ。それよりやがて八王
子の城へ向ひ。合戦をして戦ひ。太刀を
折て自殺。ふかき疵を負ひて侍り。今は
かうとええ侍りて。太刀をかなぐりすてゝ合掌し。高

聲念佛して敵に向て身をよせたり。紫
雲戰場にたなびきおひて異香紛々人多り
たり。北嶺より紫雲たなびくより人申たれば。
上人聞給て。あらまこと耳糟の往生したりとて
たゝれたる。耳糟國よりとくゑんをく妻室に愛よ。
極樂に往生疑遂めるを疑示しゝたれば。愛乃
告よれとゝろきゝ。國より飛脚を立たりて。此
事疑告て京より下たる使り行逢て田舍の

愛の告。戰場の往生に樣。たゞひとり語をたり。
誠に不思議に事よりてぞあるたる。戰場乃
命疑すゝ往生乃前途疑とけ。父祖ら名も
あげ。本願に深意をあらハせる事。さつ
かゝこれ上人勸化乃ゆへなり記

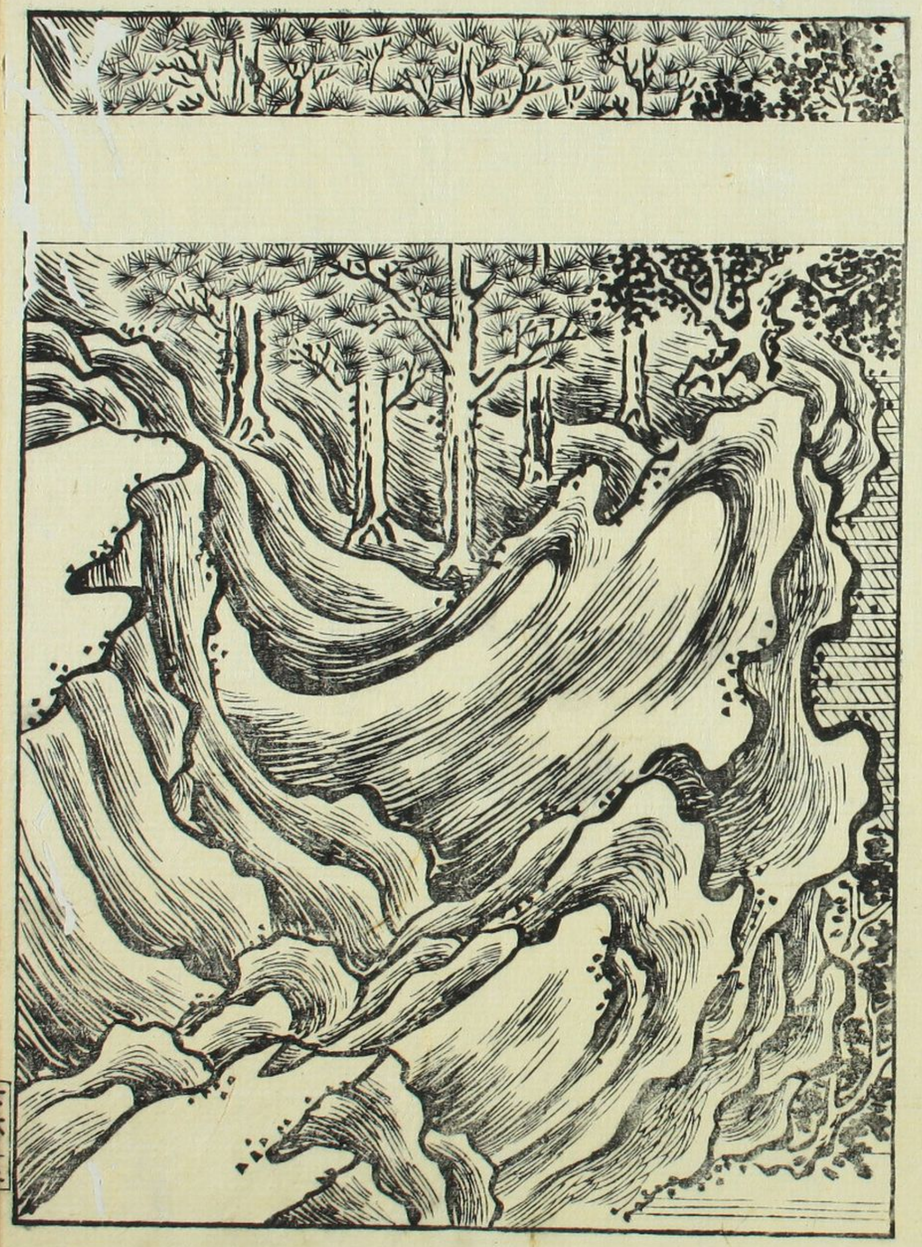


宇津宮に孫三郎頼綱家子郎従濟々として
武藏野を過ぐるに。熊谷に入道行あひて云様。
いとゝ大勢にて おはするを乃れ但いとり
多くとも。無常に殺鬼ふせぎかたくや侍ん。
弥陀如来に本願にて。念佛をすゝめをは。悪
逆にたゝ法をひのへらるゝ。一人當千乃
はたらきのもなをはるたるに。是念佛をも
うまへて念佛したまへと申たるぞ。肝にそめて
覺たる。後念佛往生に心をのけて。大番勤仕の
ためにて。上洛したりたるに。建久二年十
一月八日。上人の勝尾の草庵にたゝ居して。
念佛往生に法門御教訓をかうむる時。上来雖説
定散両門之益。望佛本願意在衆生。一向專稱
弥陀佛名乃文を二度誦して。往生せう
ぞ。ゆめ〳〵の心ぞ。一向に念佛せば。往生
疑なしと。孫ひたる御詞耳にとゞまりて覺

なる後、一向専修の行者よりてなり。上人御
往生の後ハ、ぬく善惠房をたのみ申すこの。結
縁のさめ四帖の疏乃文字讀ならひ侍て遂に
出家して、實信房蓮生と号し。西山の草
庵に居たまへ。一向専念の外他事なりき。仁治二
年十一月廿二日。天しるべき風ふきのれ四夜。蓮生夢
ゝ。深山幽谷乃北に一の庵室あり。蓮生
此中に住り。小山のくらかさなり。左右乃峯

たゝなびえたり。なを北の山をゝるに。三尺
ばかりの弥陀の立像。虛空に影向したまふ。
いかゞ。の不ふしぎ。来りまはすよと。疑を
なす所に。虛空に聲あり。て。佛来臨乃方ハ。
善光寺なりとこそ。佛やう色ちがひ給ひ
光明赫奕として。白玉のごとく誠に妙なり。此
時蓮生高聲に念佛し。右の手にて。佛の
左の手にすがりて奉る。始て木像の来現に

六十八年来安置ゐ本尊たりとしらりぬ。蓋
さめて後いよ〳〵信心をぬくして。念佛の
勇をなす。行住座臥乃四威儀をも〳〵稱名乃
外他事なきを。正元元年十一月上旬ゐ比
より。御病惱ゐ事結なるこの。同十二日。端座合
掌念佛相續し。瑞相あ〳〵つまして往生乃素
懷を遂ぐるとぞ



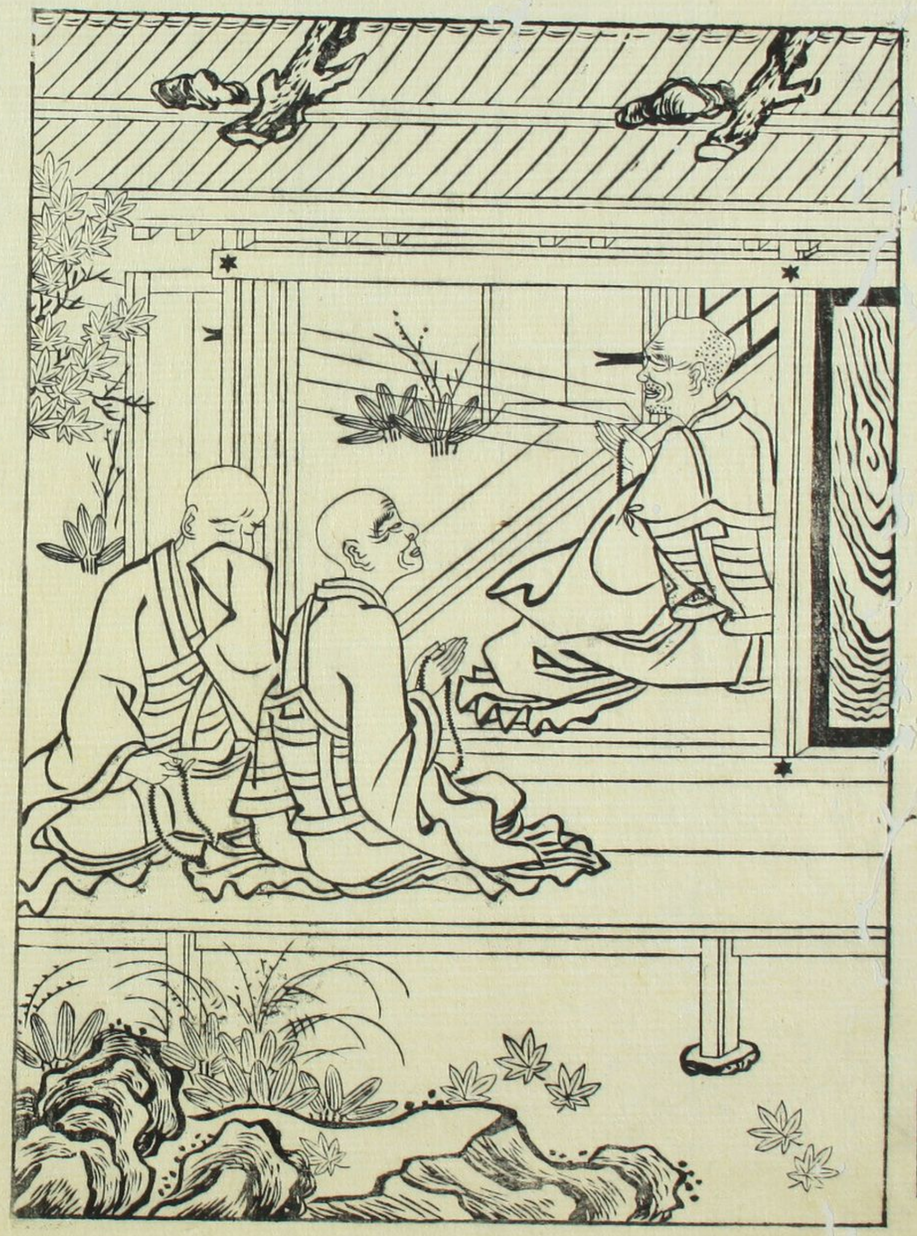
上野國の御家人蘭田太郎成家ハ秀郷將軍
九代の孫蘭田次郎成基の嫡男なり。武勇の
道よたしなみさつかく弓馬乃藝をもつて射獵
を事として罪悪深きまゝにて正治
二年の秋大番勤仕の上洛乃時上人の
念佛弘通化導ありて貴賤歩行運ハ
傳聞て宿縁のよをかしこるよやの菴室へ
まゐりあきるとり。上人罪悪生死の九夫孫陸の

本願よ乗して極樂に往生するいとなを世上乃
無常ハいとゝ浄土の不退を願ふへき趣を孫
ゝよ教化し給ふ。信心胸よとゝ渇仰肝よ
銘じ給ふ。年ハ真歳の十月十一日生年廿
八歳にて出家を法名を智明とぞ付給へり
なる。常随給仕六箇年の後元久二年に本國よ
下向して家の子郎後廿餘人を教導しく。
たなく出家せしめ同行ありく酒長乃

御厨小倉の村に庵室を結て一心に弥陀を
念じ。三業に西方しるべとこひねがひ世の人にも
らひて小倉の上人とぞ申ける。庵室の西一町
餘をへだてて。一間四面の御堂を造立して。
御堂の妻戸に。庵室の戸をあけあはせて。
佛前の燈明を掲取の光明と思て。常に光明
遍照の文を唱へ。發露諦法しるし。具縛の
凡夫たりとても本願を頼て念佛せば。往生う
ひあるべしと示し給ひ給。上人示し給ひ給。
うく心府りをたもえて。行住座臥に念佛を
こゝる事なれば。ほとんど念佛の外他事なく
ちらちら。念佛せざるものをはぢじ。
いとひ給ひの室よりのそむ道俗尊卑。念佛せぬい
たり者。或年元日の祝言に下僧一人に
心を合て。庭前にすゑいてゝ。たゝにをれ
申さんといはせて。西方浄土よりの御系をそく法。

いそぎ御系あるへしと。阿弥陀佛ハ御使なりけ
ゆ。申させく。歡喜ハあまわ。客殿へ請じ入く。丁
寧ようてなり。種この引出物をそ設いせ今日
其後八年この事よりく。元日よりはこのもぶ殺
なん結構しけり。のハ山里にい鹿ほうり夢
をしん作毛をまくせんためよ。のハ所の人民等。
田畠よ墻をとまつてぬせぎけるをあいれと
歎て。上田三町を作りたてさせく。鹿田と名
付く。鹿の食物よあてなる田歌と云事
よは。念佛をなん唱させきる。寶治二年九月十五
日。鄙遠例の氣あわ。舍弟淡路守俊基ハ
よせく。我身ハ老病あひをしてそてに終
焉よのぞめわ。今生ハ對面今日ぐらわ。汝
罪悪深重ハ人なり。必念佛してなく安養の
浄刹よ系會せむ。たゝひ鹿鳥を食す
ゝ。念佛をはかとまぜて申すへし。たゝひ敵に

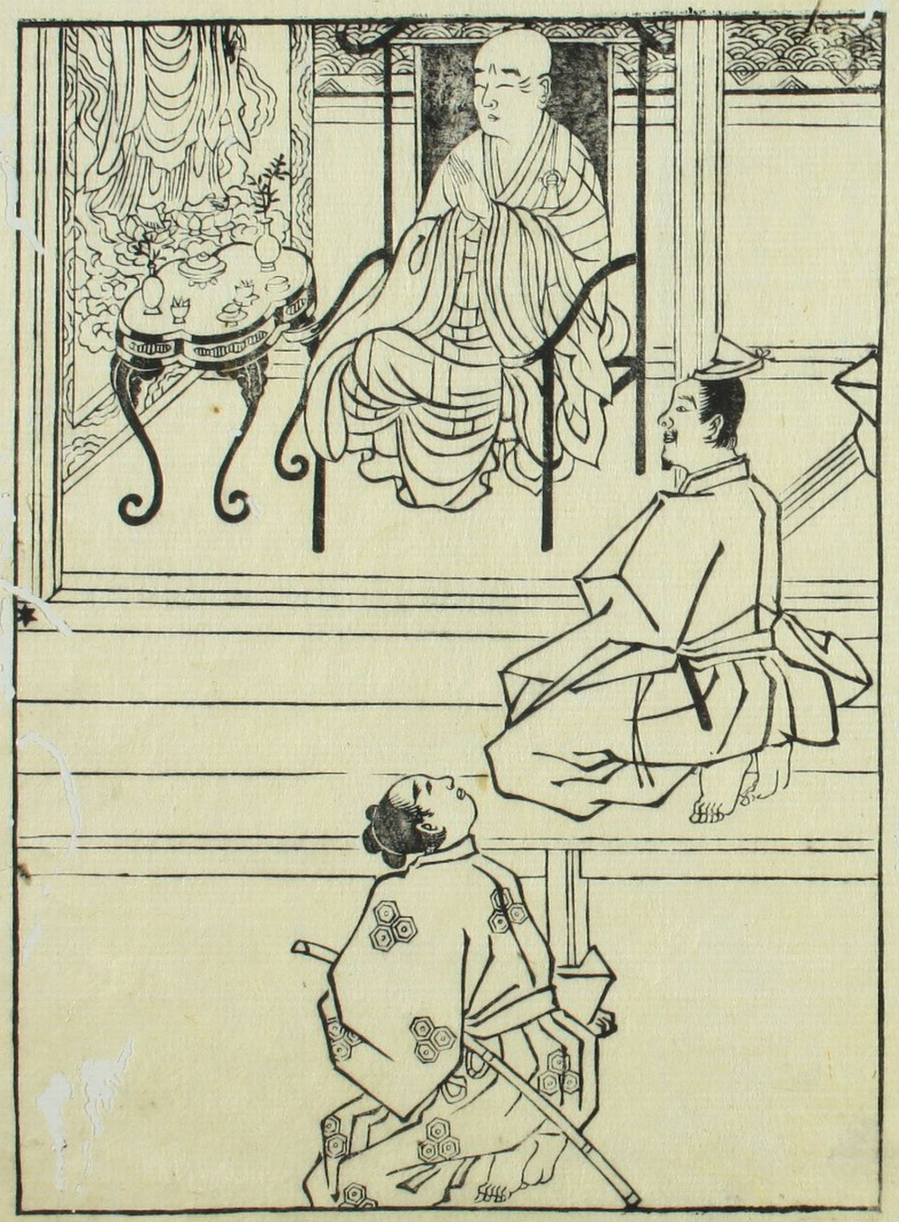
応て弓をひくことを。念佛成ぜんる事なれと。
ちまくよ教訓しなり。後基還向の後僧衆相
ともに別時乃念佛を修して翌日十六日戌尅より。
端座合掌しく光明遍照乃文を誦し。高聲
念佛一時ばかり唱へく。禪定に入ごとくふて。
息絶しなり。生年七十五なり。時に紫雲屋上に
たなびき。音樂雲外にきこえく。持佛堂庵室
間に光明充滿し。室内乃外に異香薫ず。遠
近の道俗男女ともに見聞と。平生に昔より
構取に光明に心をとゞめるにたるして。この
光明を感得しなる。不思議にたうとくも侍哉



西明寺の禅門若冠乃時ハ常ニ念佛の安心
なと小倉ノ草庵へそ尋ら れたる。爰ニ寛元ノ
比智明房使を進して申をとゝ者ハ。年来
念佛の行者ニて。西方浄土ニ心ハ掛ん事
なり。栗ノ木とは。西乃木ニ成り。西方ノ行人
ニてむかしよりく覚悟をは。多年これを所持
すといへとも。老躰いまにをきてハ行歩ニ
ハ涙ぞノ用なきて侍ら。君西土ニ心をとゝ
ま ま 留すこれ杖をたづけ給てまつるにもへ
たわらををちわく。浄土ニまいらんと
多まふへしとて。栗ノ木の杖ををくり進し
たまはれと。返状乃たくに
者くノ杖ゆくとも。ゆくとも。
たくくうまし。西のノ杖
にて書をくノ杖者る。禅門其後ハこの勸
化を信して常ニ西土の詫生を心ゝ掛ける。

孫陁の引接をそたのまれたるほとに弘長二年乃
比上人乃孫弟敬西房法蓮房弟子関東下向の時上人の
傳を進しをりたるに數日被ゑ付後上人乃
德行をたうとくし念佛の安心を尋ねられ
往生の故實勤行の文なと紙書てをりきをと
禪門自筆の返状云故實なるしるしを勤行の文なり
ぬるとくとは見え侍て往生の心をすむ為く
侍云云取詮 遂に翌年弘長三 十一月廿二日辰尅臨終

正念端座合掌して往生をとけられ同十二月
十五日諏訪の入道蓮佛敬西房に送をきる
状云西明寺殿御往生の事申とく不及申同出
世記次第にて侍十一月廿二日亥刻に唐衣め
して袈裟をけて西方に阿弥陁佛をとけまい
らせて倚子にのりたませて御威儀すこを
こぶれど合掌して御往生侍なり御ようら
そて侍しかをすこを御皆痛侍ぬ然

願き御往生の因縁よて佛々ちかを覺佛。往臨
終ちかくなれば佛くからけなき信を叡て
佛き。阿弥陀ほとけ御力よて。淨土へまいる
たくもしうへうするぞと信の佛しるは。日比
不足なくかうぬりて佛し御恩よは。百倍千
倍して喜ぶ。をもあわかく覺佛て。數乃
中にをうれしく佛。故入道殿の信り。蓮佛地
獄よりとらぬ樣よ教訓佛へと。信佛るよ

うけたまわり佛へし。念佛往生ぶ次第。便宜よ
うれら信こすりに信るへく佛。云云 取詮 抑ぶ禪
門武將の賢哲。柳営の指南として。若冠のそぶ
うこよの里。最後ぶをいわまて。上人勸化乃風を
うけ。西土往生の望ぶ。ほとけ。極樂乃引導すへきよりまて。病中よら
きり孫ひろん。あつまにりこと。覺信る